

倉橋惣三「保育法」余聞 (5)

幼児の表現論(二)

— その考察と背景 —

土屋 とく

前回では幼児の表現に対する倉橋先生の見解と、保育項目との関連で出されてきた誘導の方法等について記述した。今回は続いてその内容の考察と、何故こうした主張がなされたのか、その背景にあったと考えられる事項のいくつかについて触れてみよう。

一、*“自分の芸が身にしみる”*をめぐって

講義録の中で、幼児の自己への表現と満足を語る言葉として出されてきたこの箇所は、長年その解釈の難しさを筆者に迫るものであった。

先生にとっては何気無いような言葉であり、なお最

も正鵠を射た言い表し方であっても、現代においては誰もがその内容を確実に読み取れるとは限らない。

「芸」とは、身に学び得た文武の技。芸能。芸術。技芸。(広辞苑)であり、一般的な理解からいえば修練を経て身についた能力をさす。しかしここで言う芸とは修練以前の幼児の表現に関する見解である。

また「へしみる」とは、古語の「染む」の口語体で感情に深い印象を受けることであり、心に深く味わわれる・しみじみ感じられるという意味をもっている。

しかし、幼児が表現しようとする時の心理の内に、他から見えない内部感覚としての自分自身の満足があると言くと主張は、明確に証明することはできないながら、これが本当ではないかと認められる説得力を持っている。

更に「自分の芸が身にしみる」という感覚は、芸術的表現という行為全般に存在する微妙な内的衝動そのものなのではないか！ということに思い至る。

何らかの表現を試みようとする者がとる行動は、まさに自身の中に生じてくる止みがたい衝動につきうごかされて、そのエネルギーを外に向けて放出する行為であって、外部からの強制的なヤラセだけで成立するものではない。

彼等は表現したいから行為するのである。最初からその効果だけを計算して取り組んでいくとは思えない。一つの作品を作り上げる動機や過程の中で、しぜんに醸し出されてくるものだけが真の芸術に近づきうるものであり、内から止みがたく立ちのぼってくる力そのものが人をしてある表現に向かわせる。

そして自身の内部感覚で自分自身に納得される表現ができた時、表現者は心身一体の無上の喜びに浸される。こうした境地はまさに「自分の芸が身にしみる」ことなのではないかと思う。また優れた芸術表現が場と機会を得て、人々の感動を呼び起こすのは、スル者のエネルギーがウケル者に伝わり、両者の間に生じる

共鳴が悦楽となつて、生きる力の再生に繋がるのではなからうか。

そこに至る迄には表現の質そのものを高めるための修練が必要であり、時には苦しい努力が重ねられよう。しかし表現したいものの本質を掴む感性と技能が、あるレベルに達した時に現出される姿や作品は自身で肯定される心からの充実感に繋がる。

こう考えてくると、表現を成り立たせる本質は元來この原始的な内部感覚であり、芸術というものは、幼児の表出から表現に分化する発達過程の中で芽生えをみせ、人間の一生のなかで次第に花開き、実を結んでいく。しかしその底に流れるものは一貫したものであり、そうした芸術的表現というものの根源的な意味を、この短い言葉に託して、先生がさりげなく語ったのではないか。

また子どもの現したい思いは、大人が考える以上に多くのものを含んでおりながら現す手段に乏しく現し

きれないものを、どう読み取っていくかの重要性を暗に示唆しているのではないかと解釈することができ（老成した一流の芸術家が無心の境地で表現に向かう時、身にしみる喜びが最も純粹な形で体現され、それは幼児の感覚と不思議な一致をもつものではないかと、感じられることがしばしばある）。

二、表現と自発性について

前回に幼児の表現を自発性との関係で述べたが、この件に関しては大正四年の『婦人と子ども』一月・二月号に保育入門として（一九、幼稚園教育の方法 第三、其の手段）として次のような記述がある。

動作遊戯——幼児の精神生活を最も自発的に、最も具体的に、音声によって発表するものが唱歌ならば、これを身体の運動によってするものが動作遊戯である。元來、観念なり情緒なりを身体的に表出する處の踊り、所作、身振りの類は、今日に於いては

極めて発達したる芸術的技巧に属するものとなって
仕舞つて居るけれども、その原始的な性質に於いて
頗る自然的自発的なものである。……前項―音楽唱
歌―の條に於いて述べたると同じ注意は、この場合
に於いても必要である。すなわち、技巧よりも其の
自発を尊重し、外部的の巧緻よりも、内部的情緒の
力を重んじることである。之なければ音楽が其の生
命を失う如く、動作遊戯も亦其の唯一の生命を失ふ
のである。……

手技、圖畫――幼児の抑えきれない自発性が、その
ままにあらはれて、聲調音律となり動作身振となる
と同じく、ものに託して之をあらわすものが手技で
あり圖畫である。

勿論、何を型どり、何を描くかは、その時々の影響
に支配される。

この論述を見れば自ずからわかるように、幼児の表
現活動についての考えは若い時代から主張され、一貫

していることが理解出来る。

保育の根本考察を追求した先生は、實際保育の指導
に關しては寧ろ積極的な發言を出来るだけ控えていた
ように思われ、菊地ふじの先生も「保育内容について
もつともつと聞いておきたかった」と講義の時間切れ
を記録の中で惜しんでいるが確かに文献が少ない。

しかし、その原理を自発性と具体的に置き、へ保育
はいかなる様式を取つても良い。人々の特色、またそ
の場合場合の生きた活用をすべきであるが、いかに立
派にされたとしても、その方法が自発的になされなけ
れば、またその結果が実に立派であっても、その方法
が自発的にあらざれば、それは根本原理に背いた大失
敗である。と確固たる信念を貫きながら尚且つ現実
的で柔軟な姿勢でのぞんでいるのである。

三、菅原教造との交遊

倉橋先生の幼児表現に対する考え方には、東大時代

から最も親交があつた畏友であり、後に義兄となつた菅原先生の影響が色濃く関係しているように思われる。

(同じ心理学科卒業。東京女高師で永く教鞭をとり、新制大学になつたお茶の水大学でも美学を講じた)この講義は筆者も受けている。奥様が姉妹であり倉橋先生のご葬儀では委員長の労をとられた)

昭和十年に行われた日本幼稚園協会夏期講習会の際に菅原先生が『子どもの繪』と題して講演した内容は、ご自身のお子さまの絵を例に引きながら芸術一般に対する考察を述べたものであるが、その深く高い見識は今日に於いても古いものではなく、傾聴すべきものが随所に示されている。

一部を引用すれば

○〔繪の大道は一筋道——芸は同質〕 之は実は繪と

言つても人間と言つてもいいんです。人間の代わり

に社会と言つてもいいんです。凡て繪というもの

は、幼稚園で子供の描く繪でも、小学校でも、中等学校でも、専門の美術学校でも、要するに繪の大道は一筋道でありこれをもつと大きく言い現せば、凡て芸というものは同質のものだという事を根本に考えなければなりません。それですから小さい子供の描く繪も専門家の大家がそれを見て「ああ面白い」と感心するたちの見方が大切なんです。

教育者の根本の欠点は幼稚園時代だから斯うという風にしか見ないことなんです。同時に小学校だから、中等学校だからと繪の大道を言わないで(これは実は繪の本筋の道が解らないからなんです)段階的にもものを見る悪い癖がついている事なんです。

……

子供の知的生活が簡単から複雑へ、碎いて言えば馬鹿から利巧へ発達するものときめてかかっている事なんです。……文化、芸術、殊に繪の世界になりますと、発達とは美的統一のあるという事、芸術的

の価値のあるという事であり、未発達とはその統一のない、芸術的価値の少ないと言う事なんです。ですから繪としての初心の・無邪気な・素直な描現は、その細工をしない・手のこまない所に、却って単一から来る特殊の価値を示すことが少なくないのです。……

『子どもの繪』は一気に統一に向かって追ってくる力強い表現を与えます。単純をもつて統一された全体の味があるんです。要するに芸は同質のものであり繪の大道は一筋道なので、子供の遊戯にし

ても、表情にしても、繪にしても、人間の大道に即した眼で見て、初めて眞の味というのが掴めるのだと思います。

○ 筆をとって紙の上に描くを、畫面の繪と言うのに対して、まだ「畫面の繪」にならずに気持ちで躍動して居る繪を「心境の繪」と申します。これを繪を描く事が出来ない素人は、かなり持っており、繪を描ける人は尚更鮮やかにそれを持っているんです。

子供であると、その心境の繪というものの躍動が実に豊富なんです。例えば十二巻のフィルムを一點



に凝縮したようにして心境の繪を握りしめて、それを發展させるんです。その一部が畫面の繪になって現れてくるので、其處から一面に心境の繪が豊富に多方面に動いて躍動し、躍動しているという事は、心境の繪で自由自在に畫面の繪を変化して、それを眺めて居るという事なんです。……

○「向きの繪」は「氣持の素」が體の動き手の動きになつて、そのまま畫面になつたものです。……等々

其の一から其の五まで子どもの絵について詳細に説明を行っている全容を紹介出来ないのが惜しまれるが、「保育法眞諦」を世に問うた時期と重なつて、全国の保育者にこうしたレベルの高い講演がなされた事。また倉橋先生が種々の経緯から幼児の表現に関しては菅原先生に説明を託されたのではないかと考えることもできる。なお戦争をはさんだとはいへ、これだけのものが後の保育内容に生かされず、空白の時期が

あまりにも長かつたと今更ながら残念に思われる。

四、芸術を愛する資質と環境

類い稀な感性に恵まれ、該博な知識と芸術一般にたいして深い造詣を持たれていた倉橋先生は、絵画の鑑賞・児童文化について数々の発言をされ、日本の幼児教育に及ぼされた影響力は今更ここに述べるまでもないが、その背景とエピソードに少し触れてみたいと思う。

優れた資質に加えて、幼児期からの環境が大きな影響をもたらしたことは、自伝である『子供讃歌』に自己分析的に詳しく記されているが、いふなれば良い意味での江戸文化と近代文化両者の、また日本古来のものと、洋行などを通して学ばれた体験が和洋全般にわたる一層幅広く深みのある芸術的感性につながつたと言えるだろう。

「父は母と共にまことにいい親であつた」と語る中

で、厳しさを持ちながらも、まめな人、多趣味人であり、いつも親と共に楽しく教育を教育として行わなかった親の態度と共楽と信任とを感謝する。母上をしみじみ想うのは静かに座って縫い物をしているので肩の姿であり、夫の趣味に合せて三味線をフトもホソも立派にやつてのけたとも書いてある（註 フトとは浄瑠璃Ⅱ義太夫の三味線を指し、ホソとは長唄・清元・常磐津などの三味線のこと。両者の棹さおの太さの違いから自ずと音の高低や響き弾き方が異なる）。

また歌舞伎好きは有名であり、特に名優と言われた六代目菊五郎の大ファンで授業の中でその所作を示し蘊蓄を傾けることもしばしばあった、と卒業生は語っている。そして絵画・音楽・劇を問わず一流の芸術を鑑賞することを熱心に勧め、各自が芸術に対する目を養い感性を磨くことが、子どもの理解や良質な保育に繋がると説いたという。教えを受けた方々はこの勧めを生涯を通じて実行しておられるのもすばらしいこと

である。

倉橋・新庄共著の『日本幼稚園史』に、大正十五年四月二十一日フレーベルの誕生日を期して、日本で初めて幼稚園が独立の法令として公布され、関係者の喜びの様子が三日にわたって行われた記念大会の記録として載っている。昼の全国大会の後二日夜の帝国教育会館でのパーティー。三日目午後、戦前は特別の許可を要した新宿御苑の拝観。次いで「此夜、有志の人々の歌舞伎座観劇があつた。名優の妙技に恍惚として、かれ人ともに、連日の疲れを忘れたことであつた。」Ⅱ倉橋稿Ⅱとあるが当時としては歌舞伎が最高の芸術的娛樂だつたことが伺われる。

むすび

倉橋先生の幼児表現に関する特質は、いふならばその保育論全体に一貫して流れている。

1 子どもの育ちゆく姿を実に鋭く詳細に見つめて

導き出された論であること。

2 子どもというものを統合体として、分析と同時に

に総合的視点に立ちかえって、自身の主張とさ
れていたこと。

3 優れた感性の持ち主であり、芸術一般に対する

造詣の深さを示しながら、その底に常に豊かで
温かい心情を秘めていたこと。

4 生涯を通じて教育の根本考察を追求し、その敷
衍に努めたこと。

等を改めて感じさせるものである。しかし幼児の表現
に関して優れた主張を随所で述べながら、それが重複
し語られているのは、明治の幼稚園開設の時点から定
められた保育内容としての〔項目〕に縛られざるを得
なかつたからではないかと推察できる。

現在の教育要領では、長らく分断されていた幼児の
創造的表現というものが、纏めて論じられるように
なつたことを、倉橋・菅原両先生が幼児のために共に

天上で喜んでおられるのではなからうか。

(洗足学園短期大学)

参考文献

- 『倉橋惣三「保育法」講義録』菊地監修 土屋編 フレーベル館
『倉橋惣三選集』 第一巻——第五巻 フレーベル館
婦人と子ども 第十五巻第一・二号 フレーベル館
幼児の教育 第三十五巻第十一号 フレーベル館
日本保育学会大会 第三十七・三十八・三十九・四十四回
研究論文集 林 健造 造形表現に関する諸論文
『倉橋惣三その人と思想』 坂元彦太郎著 フレーベル館
『日本幼稚園史』 倉橋・新庄共著 フレーベル館
『生活に根ざした保育を』 菊地ふじの著 大泉双葉幼稚園
『子どもに生きた人・倉橋惣三』 森上史朗著 フレーベル館
『風姿花伝』 世阿弥 野上・西尾校訂 岩波書店

他